



知っていますか？子どもの”育ち” No8

～親に伝えたい子どもの発達とその意味～

なんご
喃語から意味のある言葉へ



反復喃語（なんご）（生後6～7ヶ月）～意味ある言葉へ

この時期になると乳児は発声や調音を自分でさまざまに変化させながら、それを自分で聞き楽しみ、反復することを楽しむようになります。また「あぶあぶあぶー」「あむあむ」「うまうま」など違った音声を組み合わせて発するようになります。乳児の「なんご」を養育者が同じようにまねて言い、その後、今までとは異なった音声を発すると、乳児はその養育者の口の動きをじっと見つめ、それに近い音声を発しようと模倣する姿が見られるようになります。「なんご」を反復しながら発声筋肉運動を司る構音器官と聴覚神経が協応する働きが著しく発達します。やがて9ヶ月を過ぎるようになると、自分や周りの人が発してきた音声がよいよ意味を含んだ言葉として組入れられていきます。

「いないいない」「ばあ」「あった」「おいしい」

など、養育者との交渉を意図したシグナルとした、動作を用いる時にも音声を発することが多くなってきます。発声そのものが意図的シグナルの役割を帯びてくるわけです。あるやりとりの場面で発せられる養育者や乳児自身の音声が、動作と重なってコミュニケーション効果をもつようになってきます。いっとき見えなくなった物が出てくると「あっ、あっ」（あった）。乳児が物を落とすと養育者が「あーあ」と言ったりします。すると乳児はわざと物を落とし「あーあ」といって喜ぶなどいい例です。やがてある特定の音声（マンマならマとンとマという音の組み合わせ）が、どの人にとってもほぼ共通するモノ（表象）と結びついていくことがわかり、意味をもった言葉になっていきます。一語文の獲得は「もうすぐそこ」にきています。

